

近代文学研究叢書

第二十卷

昭和38年11月5日 印刷

昭和38年11月15日 発行

昭和47年3月20日 二刷

[¥ 2 5 0 0]

著者	発行者	印刷者	発行所
昭和女子大学近代文学研究室	東京都世田谷区太子堂一〇七 小林寅次	東京都千代田区神田錦町三丁目一四番地 梶原忠幸	東京都世田谷区太子堂一〇七 昭和女子大学近代文化研究所 振替口座東京一七〇八六七 電話(位)五一三一・八番

近代文学研究叢書

第二十卷

昭和女子大学

近代文学研究室

監

修

池石石上太荻片金河木坂佐笹佐山島玉辻内成能濱人保細本村吉

田松間 見德勢瀬 井田 藤澤^々本 鱗子桐 原 田井森田田
川坂 藤村 宮 木由俣 井
澄定久 圓太賴正 幸謹 幹美 實健顯 三磯延吉龜
八五 泉

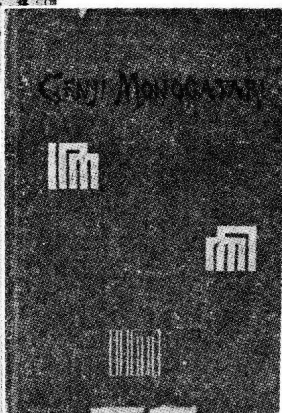
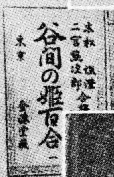
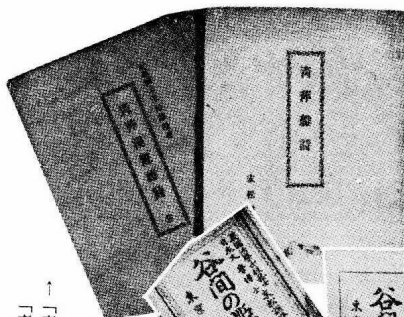
鑑貞男吉郎水智二英修郎郎明二允二助鑑濯勝賢郎吉都清雄孝夫

(国語学) (近代文学) (近代文学) (劇文学) (国文学) (近代文学) (美 学) (国語学) (近代文学) (仏文学) (英文学) (国文学) (比較文学) (英文学) (国文学) (独文学) (国文学) (英文学) (和歌文学) (歴史学) (英文学) (和歌文学) (俳文学) (比較文学) (英語学) (児童文学) (国文学) (国文学)

末 松 謙 澄



謙 澄 肖 像



↑ Genji Monogatari Suyematz Kenchō 一明治二十七年十一月刊 (昭和女子大学蔵)

←「日本文章論」一明治十九年十一月刊 (昭和女子大学蔵)



→「谷間の姫百合」全四冊一明治二十一年二月一二十三年九月刊

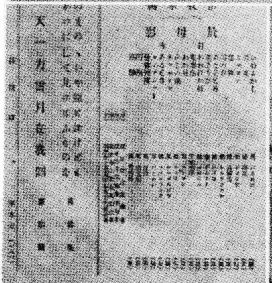
↑「青萍雜詩」一明治二十四年四月刊 (昭和女子大学蔵)

「青萍漫遊雜詩」一明治二十四年十月刊 (昭和女子大学蔵)

(昭和女子大学蔵)

森 鷗 外

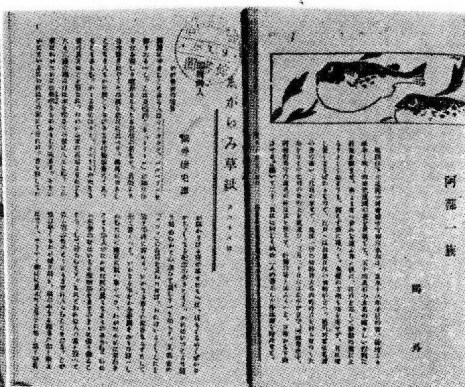
「於母影」―国民之友五八号夏期付録 同上第一頁（昭和女子大学蔵）
 創作集「涓滴」―明治四十三年十月刊（昭和女子大学蔵）
 下段右―鷗外の発刊した雑誌右よりしがらみ草紙（明二十二年）、芸文（明三十五年）、
 万年艸（明三十五年）、（昭和女子大学蔵）



三鷹市神林寺にある墓（右端）

森 鷗 外

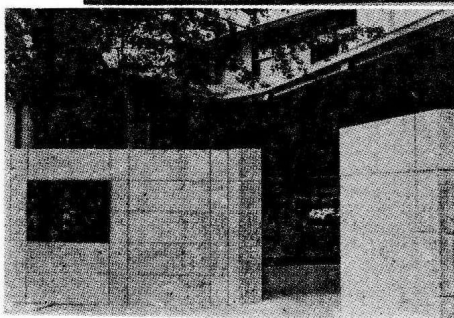
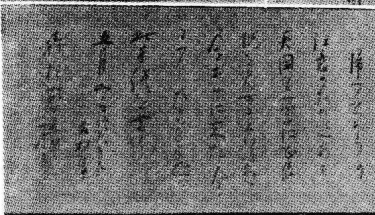
「つきくさ」
一明治二十九年十二月刊
(昭和女子大学蔵)



「阿部一族」中央公論二八年一〇号所載(昭和女子大学蔵)

上段中、「即興詩人」冒頭しがらみ草紙三十八号(昭和女子大学蔵)

晩年(大正十一年五月)
奈良からドイツに留学中の
長男於菟にあてた書簡(文
京区立鷗外記念本郷図書館
蔵)



文京区駒込千駄木町二一鷗外邸(観潮楼)跡
(現、文京区立鷗外記念本郷図書館)



追責碑(駒込蓬萊町高林寺
緒方洪庵墓城内)

目次

口	繪	
第二十卷の成立	昭和女子大学近代文学研究室……	(八)
凡例	昭和女子大学編集室……	(一三)
末松謙澄	近代文学研究室……	(一五)
J・マードック	近代文学研究室……	(一八)
森鷗外	近代文学研究室……	(一九)
近代文芸年表(20)	近代文学研究室……	(四三)
卷末附記	人 梶 圓 吉……	(五二)

第二十卷の成立

本巻には大正九年十月から十一年七月までに歿した左記四名の研究調査を取めた。

末松謙澄は安政二年豊前国京都郡前田村（現福岡県行橋市）の大庄屋末松家の四男に生まれた。幼時村上佛山の塾に入りその天稟の美質はの師の囑望するところであつたが維新変革の波濤は彼の家にも及び、一時は一家離散の憂目にあつた。十六歳青雲の志を抱いて上京したがその状態は彼が「辛未冬出于東京自是其学後学無常師居無定処殆与皂隸伍落魄都門者前後数年」と書いたようなものであつた。明治五年に創設された師範学校に多数の競争者を排して合格したが学校に不満を抱き「長鋏帰乎」を賦して退学してしまつた。その後はフルベツキの家に寄宿していた高橋是清と英米の新聞を翻訳して方々の新聞社に売りこんだりして暮した。その縁で日々新聞社に入社することが出来た。

彼が後に官界に活躍するに至つたのは時の参議伊藤博文の知遇を得たことによる。明治八年特命弁理大臣黒田清隆に随行渡鮮、九年工部權少丞、十年太政官權少書記官、望まれて山縣有朋の記室となり西南役に従軍、彼の起草した西郷宛の勅服状は敵軍にもはやされたといわれる。十一年英国公使官一等書記生見習として渡英、ケンブリッジ大学に入学、十九年帰朝、二十二年伊藤博文の長女と結婚、その後法制局長官、逓信大臣、内務大臣等を歴任した。

明治文化の指導者達がみなそうであつたように謙澄の明治文化への貢献も多方面に亘っている。滯英中のグレイの「エレジイ」シェリの「雲雀」等の詩の漢訳は「新体詩抄」の訳詩の機運を開いたものといふべく「源氏物語」の英訳はわが古典文学の精華を海外に紹介した最初のものであつた。ドラ・ソーンの翻訳「谷間の姫百合」は従来の政治小説科学小説と異り人情を主とした文芸作品で、その序文や例言には文化指導者らしく風教維持の配慮や言文一致についての意見が見られる。「日本文章論」の文体についての意見、「歌楽論」「国歌新論」等に於ける詩歌改良意見、演劇改良会の創立や演劇改良意見アンデルの「日本美術全書」の翻訳等彼が為政者としての余暇になした業績は多方面に亘ってだけでなくいづれも明治文化の発展にとって正しい礎石であつた。

J・マードックと日本との縁は、新聞記者時代の彼が支那からの帰国の途次門司に寄港した明治二十一年（一八八八）春にはじまる。一旦帰国したが美しき日本の風土に心ひかれて翌年一子ケネスを伴つて来日した。マードックの滞日年数は明治二十一年から大正六年までの二十八年間で、その間一高、四高、高商、七高などで英語を教えた。当時の生徒であつた夏目漱石の追憶記は、純粋な人となりの中に多分にボヘミア的なところのあつた異色ある彼の風貌を彷彿させている。たまたまオーストラリアの士官学校で日本語を教えることになり、その教師に招聘された彼は日本に対する限りなき愛着を抱きつつ竹子夫人を伴つて渡濠した。大正六年（一九一七）のことである。オーストラリアに於ては士官学校のほかにシドニー大学の東洋科にも講義を

もち、かたわら日濠兩國の理解と親善に尽力した。滞濠五年、一九二一年（大正一〇）六十五歳で逝去、シドニー郊外ロックウッドの墓地に葬られた。

明治期のおが国の英語教育にとって彼は忘れることの出来ない存在である。英語の授業や彼の碩学が学生を裨益しただけでなく、彼の正直で開放的な性格と真面目で親切な態度は若い人達に人格的影響を与えることが少くなかった。しかし日本に於て彼が心血を注いだ仕事は「日本史」(A History of Japan)の著述であつた。このために彼は齡五十歳にして敢然と日本語の学習に志し、夫人を教師としてゐるはからはじめ、遂に古事記万葉の古典から四書五經の漢籍まで読み得るようになった。この著述のために彼はあらゆる好条件の招聘を謝絶し、英語を教えること以外のすべての時間をこれに捧げた。五頁を書くために五十冊の参考文献を読むほどの努力と学者的良心によって成つた彼の「日本歴史」が今日なお *Standard History* として内外に認められてゐるのも理由がある。

森鷗外は文久二年一月石見国津和野、亀井藩の典医の家に生まれた。長男の彼は父祖の業を継ぐべく幼時から漢籍やオランダ文典を学ばせられた。明治五年十歳にして上京、西周邸に寄寓して進文舎にドイツ語を学び、七年、年齢を二歳増しにして東京医学校予科に入学、かたわら依田學海福羽美靜について漢詩文と和歌を学んだ。十四年開校以来の最年少者として卒業、十七年陸軍衛生制度調査、軍隊衛生学研究のためドイツに留学を命ぜらる。四年間の留学中に彼は専門の医学のほか西欧の文学や哲学に親んだ。ヨーロッパ文明の本質を

深く理解した彼は明治初期の皮相的な西洋崇拜を排し、西洋の合理的精神に立って東洋の伝統的な智慧を尊重する方向をとった。陸軍軍医学校教官、同学校長、日清戦争の第二軍兵站軍医部長、第十二師団軍医部長、第一師団軍医部長、日露戦争の第二軍医部長、陸軍軍医総監、陸軍省医務局長等の激務のかたわら東京美術学校に美術解剖学を慶応義塾に審美学を講じ、美術審査委員、臨時国語調査会長等としても活躍した。文芸上の業績は評論、翻訳、小説、演劇、詩、短歌等あらゆる分野に亘っている。

評論に於ては「しがらみ草紙」を舞台として、前近代的な当時の評論界にハルトマンの審美学の理論を導入し、評論の論理的基礎を確立しようとした。英米経験派の現実的立場をとる逍遙との所謂没理想論争はわが評論史に於ける最大の論争であり、当時の文芸界を大きく啓蒙したことは周知の事実である。彼がハルトマン系の審美学を翻訳紹介して評論に理論的根拠を与えた功は大きい。翻訳は訳詩集「於母影」「即興詩人」「フアウスト」をはじめイブセン、マアテルリンク、ハウプトマン等主としてヨーロッパ文学の紹介につとめた。初期の小説「舞姫」「うたかたの記」「文づかひ」などは彼の留学中の精神の遍歴と青春の息吹きになったもので、それらは典雅な文体と共に清新なロマンチズムを当時の文芸界に吹き送った。自然主義隆盛の時代に於て、鷗外は自然主義文学の理論と方法については批判的であつた。鷗外の文学は彼の地位と性格と教養から自らもいうようにアポロ的態度で貫かれていた。彼と肝胆相照らすもののあつた乃木將軍の自刃は彼に日本武士道の純一無垢な精神を再認識させ歴史小説への道を聞く契機となつた。將軍の葬儀に列した日、感動をもつて「興津彌五右衛の遺書」の筆を執つたという。彼の史伝は科学的実証精神に貫かれているが、同時に人物に對

する純粹な愛情と感動によつて見事に歴史と文学を統一している。演劇に於ては「しがらみ草紙」時代には主として西洋の演劇理論を導入して具体的な啓蒙に当り、後期は西洋近代劇の翻訳紹介や創作をして自由劇場の小山内薫を助け、新劇の育成に尽力した。

大正五年に軍職を退いた鷗外は翌年帝室博物館長兼図書頭となり「帝諡考」を完結、更に「元号考」の執筆にかかったが十一年七月九日遂にその完成を見ずして「休息なき一生」を終った。鷗外文学の特色は「寂寥と悲哀」といわれる。彼自らもその心境を *Resignation* といったが、世間の名声の中にあつて自由と真理と美に生きた超俗孤高の精神は作品に静謐と寂寥の美を湛えている。その精神はまた「余は石見人森林太郎として死せんと欲す……生死別るる瞬間、あらゆる外形的取扱を辞す」といった彼の遺言にも現われていると思う。

凡 例

一、研究調査に着手してから本叢書刊行に至るまで、凡そ二十二年を要しているので、指導者中で岡田哲藏、福井久藏、池田龜鑑の三先生はすでに鬼籍に入り、研究担当者中にも病でたおれたものが数名ある。本叢書をこれらの人々に見てもらったならばさぞおよろこび下さるであろう。謹んで霊前に献上する。

二、本叢書は卒業期に近い学徒の中から担当者を選び、調査研究の範囲、方法、次第などを相談して、先ず第一に業績の検討に着手した。不明、疑問、困難、迷路などにつき当りつつ一年ぐらいするうちに明瞭になるので、次の年から生涯と遺跡を究めてからいよいよ論文作成にとりかかった。このとき、材料の批判、整理、布置、論文の構成などについて相談しながら脱稿に至る。ついで修訂、校閲を経てから編集という順で、その間約二カ年が費される。

三、収録事項の研究に対し、直接間接に協力した学徒は延三千名に上るが、その協力と、歳月の恩恵に加うるに学界、文壇、教育界、操觚界など各界先輩の懇切な教示と、遺族及び関係者の好意を感謝する。

四、年表で著作というのは、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを指し、資料とは、第三者の考説、論評、感想等の文献を指すのである。従つて死後刊行された全集物や編集物は著作年表に、第三者の解題や解説の如きは資料年表の中に収めた。又、単行本の中で編集ものは、所要の小題を書題名欄に、単行

本名と発行所を誌紙名欄に、小題の執筆者を筆者欄に掲げることとする。

五、年表の末尾に追込んだ分は氏名のみが引用されている場合が多い。資料の価値は研究の分野、方向又は時代によって移動するものであるから、できるだけ取捨をさける方針にしたが、紙面の都合で割愛の止むなき場合がないともかぎらない。

六、各稿の末尾に「採訪」と「文献」を掲げたのは、研究調査の際に訪問して教示を仰ぎ、便宜を与えられた方々に感謝の意を表すると同時に、資料の出所、起稿や修訂に当って参考した文献書目を記して、その依拠を明らかにした。ために研究資料の所在表示を旨とする「資料年表」と一部重複することがある。なお採訪した人の記名は年齢（推定）順、文献の記載も発表年次順にした。

七、引用文はすべて原文に従い、外国文の場合は訳文を添付するが、通読に便するため時に大意を用いることもある。なお原文中の誤りや疑わしい箇所は右側に（ママ）と記入し、又、異本を示す場合も同様（イ）と記入する。

八、外国の国名、地名、人名は片仮名を原則とし、倫敦、桑港のように慣用久しいものでも、逐次片仮名に改めるつもりである。但し、すでに日本語化しているものはこの限りでない。

九、邦人氏名は旧漢字を用い見出しに振りがなをつけ、外人名の初出は原語を付し以下片仮名を用いる。

一〇、年代は日本年号と西暦とを適宜織りまぜて、どちらからでも検索できるようにした。年齢は満年齢を採用したが、場合によっては数え年何歳とするすこともある。

（昭和女子大学編集室）

末^{すえ}

松^{まつ}

謙^{けん}

澄^{ちよう}

大安
正政
九二
年年
二一
九八
二五
〇五
十八
月二
十日
歿生